



一歲時的
我喵



站長努力
工作中

二代玉（左）
與小玉（右）



火車上的耳朵
是重點呀！

小玉列車上有
101隻小玉



我們是好朋友！



在最愛的
櫻花樹上



最喜歡
抱抱喵

小玉

小小

咪可
媽媽

大家的偶像

貓站長小玉

拯救了貧窮火車線的喵



貓站長小玉

(日漢對照)

小嶋光信 著
永 地 繪
周 微 譯



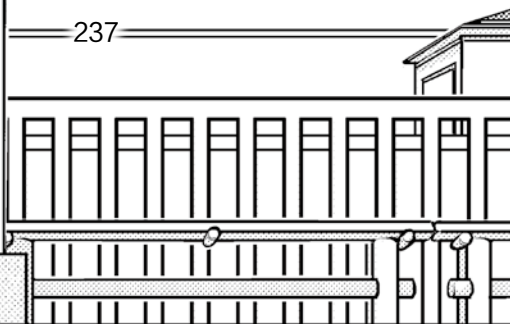
目 録

❖ プロローグ	011
1. 駅で生まれた子ねこ	019
2. 大好きな駅がなくなる	047
3. 運命の出会い	061
4. 世界で初めて!? ねこの駅長	083
5. 気がつけば人気者	097
6. さようなら、ママ	133
7. 悲しみの次に来るもの	149
8. 未来にしあわせのバトンを	163
9. いつまでもこの駅で	197
❖ エピローグ	229
❖ あとがき	237

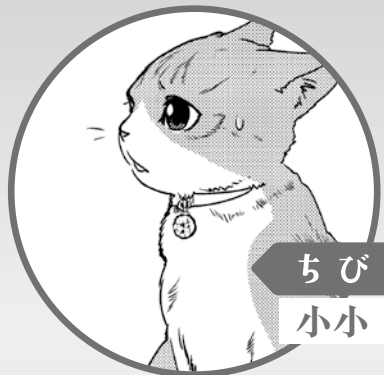
❖ 序章	011
1. 在車站出生的小貓	019
2. 最愛的車站要消失?!	047
3. 命運的相遇	061
4. 世界首位!? 貓站長	083
5. 不經意間，成為人氣王	097
6. 再見，媽媽!	133
7. 悲傷之後所到來的	149
8. 向未來傳遞幸福的接力棒	163
9. 永遠在這個車站	197
❖ 結尾	229
❖ 後記	237



と!ずっと!貴志川線 前



在本書出場的 動物和人類們



ちび
小小

小さいときに、びしょぬれで
冷たくなっていたところを拾われ、
たまが命を助けた、ちびねこ。
たまの妹分。

小時候，在雨中淋濕、渾身冰
冷之際被撿到，
小玉救了她的命，是隻小貓仔。
小玉的妹妹。



ミーゴママ

咪可媽媽

たまを産んだ、ねこのママ。
優しいけど、おこるとこわい。
駅長をがんばる、たまの味方。

生下小玉的貓媽媽。
雖然很溫柔，生起氣來會很可怕。
支持小玉為做站長而努力。

たまの初めてのねこの部下。
たま駅長にあこがれて、
仕事を覚えるためにがんばる。

小玉的第一個貓部下。
崇拜小玉站長，
為學會工作而努力。

ニタマ
二玉



貴志駅で生まれて、駅で育ったねこ。
駅と電車とお客さんが大好き。
ある日、ねこの駅長になることに!?

在貴志站出生、長大的貓。
最喜歡車站、電車和乘客。
某一天，要成為貓站長!?



たま
小玉



在本書出場的
動物和人類們



お母さん

母親

た^{そだ}まを育てた、
えき^{ばいてん}の売店にいるおばさん。
た^{にんげん}まの人間のお母さん。

養育小玉，
車站小賣部的阿姨，
是小玉的人類母親。

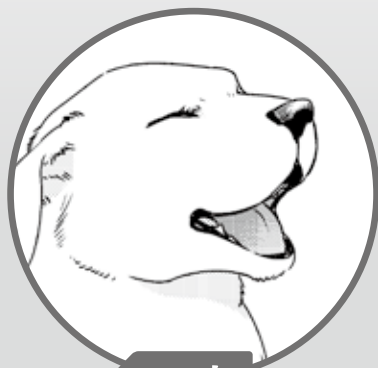


社長

社長

た^{えきちよう}まを駅長にした、
びんぼうな鉄道^{てつどう}の社長さん。

讓小玉做站長的，
貧窮鐵路的公司社長。



レオ
利奧

たこ焼^やき屋さんにいる、
た^{なかよ}まの仲良しの犬^{いぬ}。女^{おんな}の子^こ。

住在章魚燒店，
小玉的狗狗好友。女孩子。



おまっちゃん
小真

しっぽをふりふりしながら、
おしゃべり^{だいき}するのが大好きな、
た^{なかよ}まと仲良しのセキレイ。

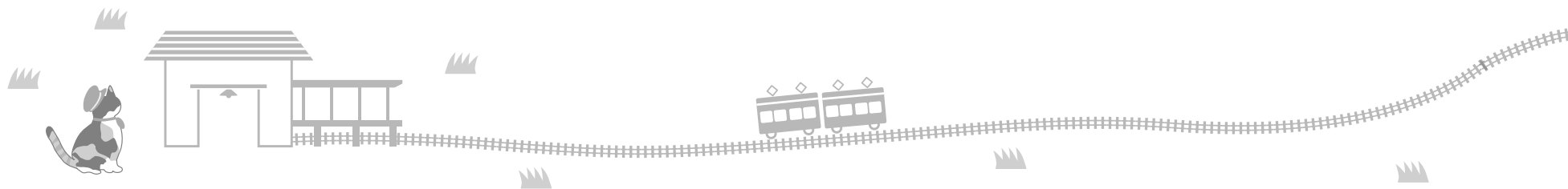
喜歡一邊搖晃著尾巴，
一邊和別人聊天，
是小玉的好朋友，一隻白面鳥。





序 章

プロローグ



「おはよう、たま」

「たまちゃん、おはよう」

おお さくら き した せいふくすがた おとこ こ おんな こ はし
大きな桜の木の下を制服姿の男の子や女の子が走りぬけて
いく。

「お、たま、きょうもごくろうさん」

しごと で い こと
仕事に出かけて行くおじさんやおばさんも、みんなわたしに声
をかけてくれる。

「にゃんご、にゃんご。みんな、おはよう」

わたしも大きな声であいさつをする。なんでかな、この駅にやっ
てくる人たちはみんなやさしくてあったかい。いつだって、ニコ
ニコ笑っている。

トコトコ、ゴトゴト、みどり やま なか はし ばたけ
の 間を走り、二両編成の小さな電車が駅に入ってきて、みんな
を乗せていく。

「たま、いってきます。また夕方（ゆうがた）にね」

「いってらっしゃーい！ みんな気をつけてね」

だいす まち ひと の でんしゃ み おく
大好きな町の人たちを乗せた電車が見えなくなるまで見送って
から、ゆっくり大きなのびをした。

「うーん、いい気持ち」

ポカポカのお日さま。ふわふわと綿菓子（わたがし）みたいなピンク色（いろ）の花
の向こうに春（はる）の空（そら）が見える。わたしは大好きな桜（さくら）の木（き）に登（のぼ）って深（しん）

「早啊，小玉。」

「小玉，早。」

穿著校服的男生女生從高大的櫻花樹下奔跑而過。

「啊，小玉，今天也辛苦了。」

去上班的叔叔阿姨也都和我打招呼。

「喵，喵。大家早。」

我也大聲問候道。不知道為甚麼，每個來這個車站的人都很溫
柔熱情。他們總是笑呵呵的。

兩節車廂組成的電車在鬱鬱蔥蔥的山裡行駛，穿過草莓田間，
啾啾啾、慢悠悠地駛入車站，帶著乘客離開。

「小玉，我們走了。傍晚再見。」

「路上小心，大家要注意安全。」

列車載著我最愛的居民們離開了，我目送著他們漸行漸遠，直
到消失在我的視線中，我慢悠悠地伸了個大大的懶腰。

「嗯，真舒服。」

太陽公公暖洋洋的。粉紅色的花兒就像是蓬鬆綿軟的棉花糖，
花兒的另一端可以看見春日（はる）的天空（そら）。爬上我最愛的櫻花樹，深呼吸。



呼吸をする。どこまでも続く背の低い山々、遠くに見えるいちご畑。和歌山県の山の中を走る貴志川線の終着駅がわたしの家、貴志駅。

「チュ、チチチチ、たま、おはよう」

青空に小さな黒い点が現れて近づいてきた。

「あ、おまっちゃん！ おはよう」

おまっちゃんはセキレイの女の子。この駅が大好きで、お天気のいい日にはこうして遊びに来てくれる。わたしの知らない、駅の外の世界の話を聞かせてくれる大切な友達。

「もうすぐ電車が到着するよ。今日はいつもより、もっとたくさんのお客さんが乗っているよ」

わたしはあわてて、ぺろぺろ顔を洗う。

「どう？ 美人になった？」

「うん、ぱっちり！」

小さな小さな町の、小さな小さな駅だから、朝のラッシュが過ぎたら、みんなが帰ってくる夕方まで人の姿はほとんどなくて、ちょっとさびしいような静かな時間が過ぎていく。それが、この駅の毎日だった……ほんの少し前までは、ね。

でも今は？

今はちょっと違うんだ。

トコトコ、ガタンゴトン。

「わあ、きれいな桜！」

「かわいい駅だねえ」

女の人、男の人、お年より、若い人、子供たち。初めて出会う人たちが駅に降りてくる。

低矮の群山綿延不絕，可以看到遠處的草莓田。貴志川線在和歌山縣的大山之中行駛，她的終點站是我的家，貴志站。

「啾，啾啾啾啾，小玉，早啊。」

藍天裡現出一個小黑點，越來越近。

「啊，小真，早。」

小真是隻白面鳥，小姑娘。她最喜歡這個車站，在天氣好的日子總是像這樣來找我玩耍。小真會和我描述車站外的未知世界，是我重要的朋友。

「電車馬上就要進站了。今天的客人比平常更多啾。」

我急忙忙舔了舔爪子，搓了搓臉。

「怎麼樣？我變美了嗎？」

「啾，非常美。」

因為這是在很小很小的地方上的一個很小很小的車站，早高峰一過，在大家傍晚時分回來之前基本沒有人煙，只有些許寂寞的靜謐時間流逝而去。這就是，這個車站的每一天……直到不久之前為止。

但是現在呢？

現在有些不一樣了。

一點一點接近，啾啾啾啾。

「哇，櫻花真美！」

「真是個可愛的車站呢。」

男女老少，一張張陌生面孔來到車站。



「たまちゃ〜ん」

「たま駅長^{えきちやう}はどこ？」

そうなの、この駅^{えき}を訪ねてくるお客^{きやく}さんたちのいちばんのお目^め当^あては、なんとわたし！

「こんにちは。ようこそ貴志駅^{き し えき}へ！」

ちょっぴり恥^はずかしいけど、がんばって大きな声^{おお こえ}と、とびきりの笑顔^{え がお}であいさつする。

だって、それがわたしのお仕事^{しごと}だから。

そう、わたしはこの駅^{えき}の駅長^{えきちやう}さん。

ねこの駅長^{えきちやう}さんって、ちょっとびっくりしちゃうでしょ。

本当^{ほんとう}のことを言う^いとわたしだってまだ信^{しん}じられない。

どうして、わたしが働^{はたら}くねこになったのか、駅長^{えきちやう}さんになったのか、それはね、とっても素敵^{すてき}なお話^{はなし}なんだ。

「小〜玉。」

「小玉站長^{こたま}在哪裡？」

是的，乘客們到訪這個車站的最大目標，竟然是我！

「大家好。歡迎來到貴志站！」

雖然有點害羞，我還是以最燦爛的笑容，努力著大聲地和眾人打招呼。

因為，這是我的工作。

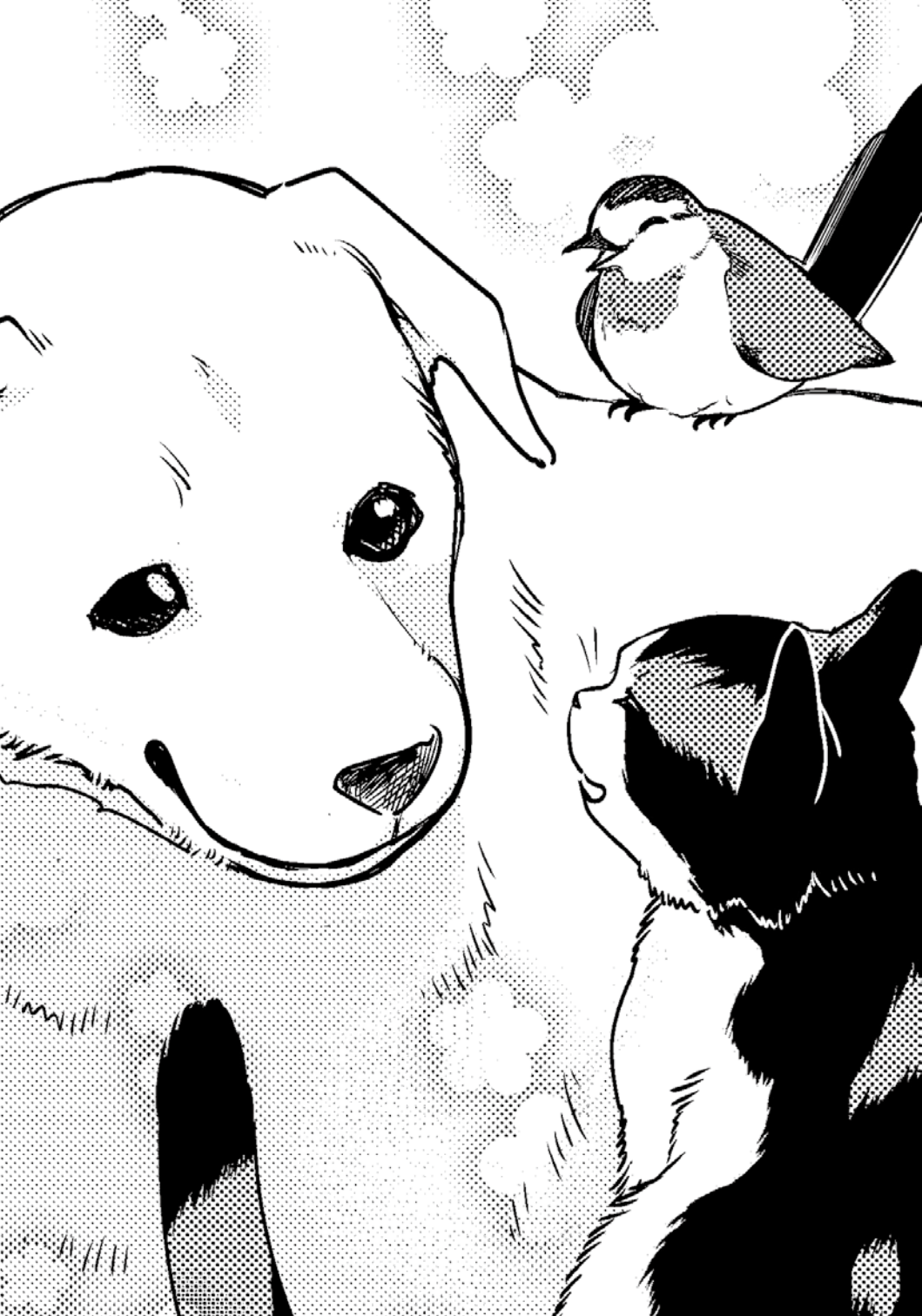
是的，我是這個車站的站長。

貓站長，有點兒讓人驚訝吧。

說實話，就連我也難以置信。

我是怎麼成為一隻工作貓、怎麼成為一個站長的？那可是一段特別美好的故事。



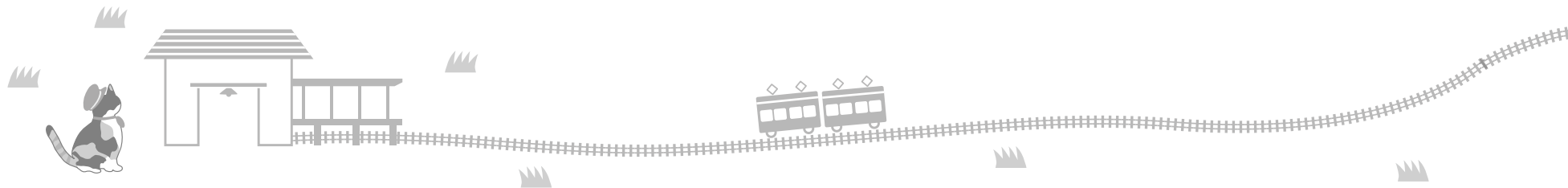
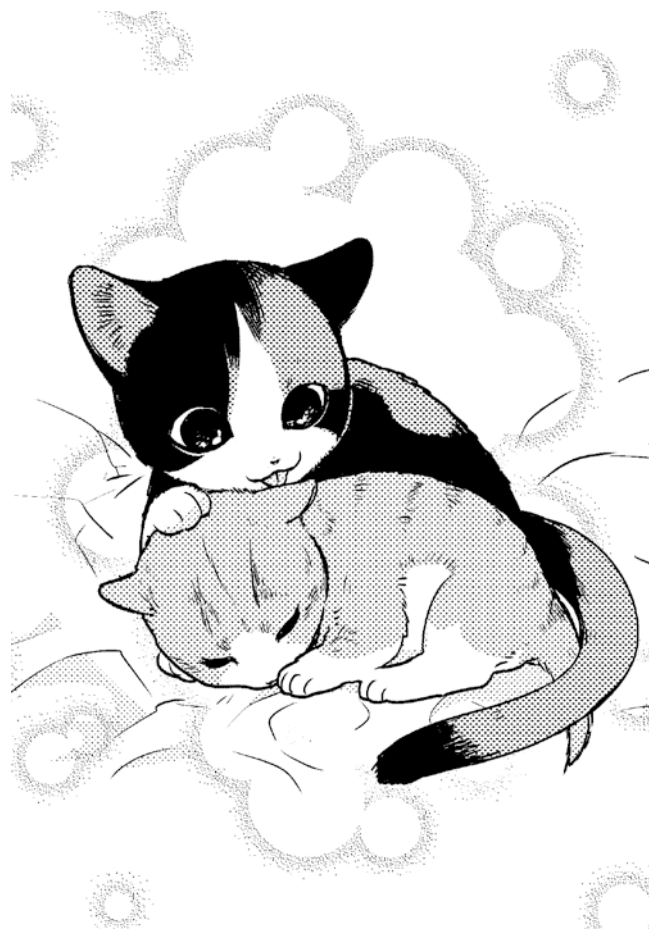
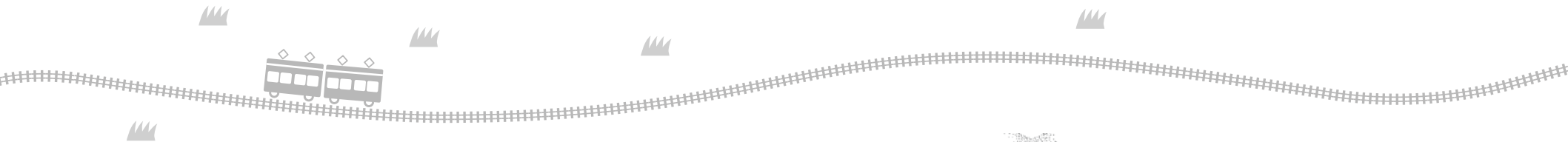


①

在車站出生的小貓

駅で生まれた子ねこ





わたしは駅で生まれたねこ。

わたしのママは捨てねこだった。寒さで震えていた小さなママを拾ってくれたのは駅のお掃除をしてくれるおじさん。貴志駅には貴志川線で働く人たちが休んだり、仕事をしたり、掃除の道具をしまったりする事務所があったから、おじさんはそこにママを連れてきて育ててくれた。

駅の隣には小さな売店があって、やさしいおばさんが働いている。

ママはこのお店とおばさんが大好きで、一日のほとんどをそこで過ごしていた。

そして、春が来てわたしたちが生まれた。わたしと三匹のお兄ちゃん、お姉ちゃんたち。

「わ！ ミーコ、この頃太ったと思っていたら、おまえお母さんになったのか！」

作業用の黄色い電車の近くで、ミイミイ鳴いていたわたしたちを見つけたおじさんはびっくり。

「まあ、どうしましょう。ここじゃあ、雨に濡れちゃうわね」

売店のおばさんがわたしたちのためにきれいなベッドを用意して、お店の屋根の下に置いてくれた。

「ミーコも子ねこたちもよくなっているし、ここにいた方がし

我是在車站出生的小貓。

我的媽媽是隻被遺棄的貓。當時還是小小一隻的媽媽在嚴寒之中瑟瑟發抖，被在車站打掃衛生的叔叔撿了回去。在貴志站有個辦公室，在貴志川線上班的人會在裡面休息、辦公或是存放清掃工具。叔叔把媽媽帶回辦公室，養了起來。

在車站旁邊有個小賣部，有個溫柔的阿姨在那裡上班。

媽媽特別喜歡這家店和阿姨，一整天幾乎都在那裡度過。

然後，冬去春來，我們出生了。我和三個哥哥姐姐們。

「哇！咪可，我說怎麼覺得你最近長胖了，原來你做媽媽了啊！」

在工作用的黃色電車附近，叔叔看到咪咪叫個不停的我們，非常吃驚。

「啊，怎麼辦才好呢？你們在這裡會淋濕的。」

小賣部的阿姨為我們準備了漂亮的床，放在了小賣部的屋檐下。

「咪可和孩子們也都很親近你，它們在這裡看上去很幸福。你可



あわせそうだな。ミーコの飼^かい主^{ぬし}になってくれるかい」

「そうね、この子^こたち全部^{ぜんぶ}を飼^かうことはできないから、家族^{かぞく}にな^なてくれる人^{ひと}を探^{さが}さないといけないけど……ミーコはうち^{うち}の子^こにな^なったらいいわ」

こうして、ママは売店^{ばいてん}のねこになり、わたし^{わたし}たち兄妹^{きょうだい}もこの駅^{えき}で育^{そだ}つことになった。

わたし^{わたし}たちが売店^{ばいてん}の前^{まえ}で遊^{あそ}んでいると、お客^{きやく}さん^{さん}たちが集^{あつ}ま^まつてくる。

「おばちゃん、子^こねこかわいいね。さわってもいい」

「いいわよ。驚^{おどろ}かさないうようにそうっとね」

「かわいいなあ。うち^{うち}のねこにしたいなあ」

「実はね、この子^こたちの家族^{かぞく}にな^なてくれる人^{ひと}を探^{さが}しているのよ」

「本当^{ほんとう}！ ぼく^{ぼく}お家^{うち}の人^{ひと}に聞^きいてくるよ」

「どの子^こにしようかなあ」

お兄^{にい}ちゃんとお姉^{ねえ}ちゃん^{ちゃん}は次^{つぎ}々^{つぎ}に新^{あた}しい家族^{かぞく}にもらわれていっ^いた。でも、いつまでたつてもわたし^{わたし}を連^つれて帰^{かえ}ってくれる人^{ひと}は現^{あらわ}れない。

「この子^こだけ色^{いろ}がちがうね。ひよひよしていて、なんだかネズミ^{ねずみ}みたいだね」

お兄^{にい}ちゃんもお姉^{ねえ}ちゃんも、ママとそっくりで薄茶色^{うすちやいろ}にシマシマ^{しましま}模^も様^{よう}のキジトラ^{きじトラ}ねこで、とってもかわいかった。でも、わたし^{わたし}だけはみんなと似^にていない。小^{ちい}さい頃^{ころ}のわたしは、毛^けの色^{いろ}が薄^{うす}くて、ぼやぼやした灰^{はい}色^{いろ}のかたまり^{かたまり}みたいだったの。

「なにをやつてもノロマだし、かわいくないし……。わたし^{わたし}って、誰^{だれ}からも欲^ほしがられないねこ^{ねこ}なのかな」

だんだん悲^{かな}しくな^なってきて、ポロンとこぼれ^{なみだ}そうな涙^のを飲^のみ込^こみ

以^い做^ど咪^み可^か的主人^{しゅじん}嗎？」

「是啊^{ああ}，但^が我也^{わたし}沒^な辦法^{はんぱん}養^{やしやう}所有^{しやうゆう}的孩子^{こども}，必^{かならず}須^す幫^{たすけ}它們^{それら}找^{たづね}到^{まで}願^{よろこ}意^び領^{りやう}養^{やしやう}它們^{それら}的人^{ひと}……咪^み可^か我^{わたし}可^か以^い自^じ己^じ養^{やしやう}。」

於是^ゆ，媽^{はは}媽^{はは}成^な了^な小^こ賣^{わい}部^ぶ的^の貓^{ねこ}，我^{わたし}和^と哥^{あに}哥^{あに}姐^{あね}姐^{あね}們^{たち}也^も在^に車^{くるま}站^{ばし}住^す了^を下^{した}來^ら。

我們^{わたしたち}一^{いっ}去^つ小^こ賣^{わい}部^ぶ的^の前^{まえ}面^{めん}玩^{あそ}耍^ぶ，就^{すなは}會^ち有^あ客^{きやく}人^{ひと}圍^{かこ}過^へ來^ら。

「阿^あ姨^{やい}，小^こ貓^{ねこ}好^{すく}可^き愛^{あい}啊^あ。我^{わたし}可^か以^い摸^も摸^も它們^{それら}嗎？」

「可^か以^い啊^あ。輕^{かろ}輕^{かろ}地^に摸^も不^な要^い嚇^{おそ}到^{まで}它們^{それら}哦^お。」

「真^ま可^き愛^{あい}。我^{わたし}想^{おも}把^を它們^{それら}帶^も回^{かえ}家^{いえ}。」

「其^{その}實^{じつ}，阿^あ姨^{やい}正^{ただ}在^に找^{たづね}願^{よろこ}意^び收^{しゆ}養^{やしやう}這^{これ}些^の孩^こ子^{ども}的^の人^{ひと}。」

「真^ま的^{じつ}嗎^や！ 我^{わたし}去^い問^と問^と家^{いえ}裡^{うち}人^{ひと}。」

「選^え哪^ど隻^{ひき}好^{すく}呢^や？」

哥^{あに}哥^{あに}和^と姐^{あね}姐^{あね}一^{いっ}個^こ接^つ著^づ一^{いっ}個^こ被^か新^{しん}的^の家^{いえ}人^{ひと}帶^も走^{はな}。但^が是^は，那^{その}個^こ願^{よろこ}意^び帶^も我^{わたし}回^{かえ}家^{いえ}的^の人^{ひと}卻^{かえ}一^{いっ}直^{ぱん}不^な出^で現^{あら}。

「只^{ただ}有^あ這^{この}孩^こ子^{ども}顏^{かほ}色^{いろ}不^な一^{いっ}樣^{やう}呢^や。這^{これ}麼^{ほど}瘦^{すく}弱^{じやく}，像^{ごと}隻^{ひき}小^こ老^{らう}鼠^そ一^{いっ}樣^{やう}。」

哥^{あに}哥^{あに}姐^{あね}姐^{あね}都^{みな}長^{なが}得^え和^と媽^{はは}媽^{はは}一^{いっ}模^も一^{いっ}樣^{やう}，淡^{たん}咖^か啡^ひ色^{いろ}上^う有^あ道^{みち}道^{みち}條^{じょう}紋^{もん}，是^{すなは}虎^こ斑^{はん}貓^{ねこ}，非^た常^{じょう}可^き愛^{あい}。但^が是^は，只^{ただ}有^あ我^{わたし}和^と大^{だい}家^か長^{なが}得^え不^な像^{やう}。小^こ時^{とき}候^{ころ}，我^{わたし}的^の毛^け色^{いろ}很^へ淡^{たん}，就^{すなは}像^{ごと}一^{いっ}個^こ亂^{らん}蓬^{ほう}蓬^{ほう}的^の灰^{はい}色^{いろ}毛^け球^{きゅう}。

「做^{しやう}甚^{じん}麼^{ほど}都^{みな}很^へ遲^ち鈍^{どん}，也^も不^な可^か愛^{あい}……是^{すなは}不^な是^は沒^な有^あ人^{ひと}願^{よろこ}意^び要^い我^{わたし}呢^や？」

我^{わたし}漸^{しだ}漸^だ難^{がた}過^が起^き來^ら，正^{ただ}當^{たう}嚥^{えん}下^げ就^{すなは}要^い滴^た答^た滑^{くわ}落^{らく}的^の淚^{なみだ}水^{すい}時^{とき}，媽^{はは}媽^{はは}來^き到^こ



んだとき、ママがそばに^き来た。

「おばかさんね。ママはおまえが^{だいす}大好きよ」

ママはわたしの^{からだ}体をペロペロなめてくれる。

「あんまりかわいいから、きっと神様がママの^{のこ}ところに残しておいてくれたのよ」

「でもでも、^{おお}大きくなったら^で出て行かなくちゃいけないんでしょ？ わたし、この^{えき}駅が大好きだけど、ずっとここにいても^{だい}大丈夫^{じょうぶ}なのかな」

「お母さんに^{かあ}頼んでみましょう。きっとここに^お置いてくれる」

ママは^{ばいてん}売店のおばさんのことを「お母さん」って^よ呼んでいた。

「お母さん、この^こ子もうちの^こ子にしてあげて」

ママがおばさんに向かって^むミャアって^な鳴いたら、おばさんは^い言った。

「やれやれ、おまえは^{ほんとう}本当にのんびりやさんだねえ。ポーッと^のして、おっぱいを^の飲むのもいつも^{さいご}最後^{おお}だったし、大きくなっても^{はん}ご飯はみんなにとられてばかり……。とてもひとりでは^い生きていけそうにないね」

それからおばさんは^めしゃがんでわたしの^め目をのぞきこんだ。

「おまえ、うちの^こ子になる？ ミーコとおばさんといっしょに^く暮らす？」

もちろん、わたしは^{へんじ}すぐに返事した。

「ミャア、ミャア、ここの^こ子になる、なる、なる～！」

「それじゃあ、^{きょう}今日からわたしが^{かあ}おまえのお母さんだよ」

わたしはしっぽもおヒゲもピンと立てて、「お母さん」になったおばさんの^{あし}足にスリスリと^{からだ}体をこすりつけた。ママもとっても^{うれ}嬉しそう。

我身边。

「真是個小笨蛋。媽媽最喜歡你了。」

媽媽用舌頭舔著我的身體。

「因為你太可愛了，所以一定是老天爺想把你留在媽媽的身邊。」

「但是但是，等我長大了就必須要離開這裡了吧？雖然我很喜歡這個車站，但我可以一直留在這裡嗎？」

「我去問問我的母親吧。她一定會留下你的。」

媽媽把小賣部的阿姨叫作「母親」。

「母親，請把這孩子也當成你的孩子吧。」

媽媽朝著阿姨喵喵地叫道，阿姨回答說：

「真拿你沒辦法。你可真是一隻悠閒的傢伙。一直發呆，喝奶也總是最後一個，長大了也總被哥哥姐姐們搶走吃的……看樣子一個人很難生存下去吶。」

這麼說著，阿姨蹲了下來，直直地看進我的眼裡。

「你要做我們家的孩子嗎？要和咪可、阿姨一起生活嗎？」

當然，我立刻回答道：

「喵，喵，我要，我要，要做你家的孩子！」

「那麼，從今天開始我就是你的母親了。」

阿姨變成了我的「母親」，我豎起尾巴和鬍鬚，用身體蹭著她的腳。媽媽也看上去非常開心。



「ああ、よかった。これでひと安心。わたしがママで、お母さんはわたしとおまえのお母さんで……ちょっとややこしいけど、ねこのママと人間のお母さんの両方があるなんて、おまえはしあわせだねこだね！」

「ミャンゴ、ミャンゴ！ わたしはしあわせだねこのの」
その時から、わたしは「たま」っていう名前をもらって、この駅のねこになった。



人間のお母さん、ミーコママ、お客さんたち……みんなに見守られてわたしはどんどん大きくなった。

もしやもしやと混ざってネズミみたいに見えた毛の色は大きくなるうちにきれいな三色に分かれてきた。

「こんなくっきりきれいな三毛猫はなかなかいないよ」

「この子は縁起がいいよ」

お店に来るお客さんたちが口々にほめてくれる。

「たまはきっと、お店にも駅にも幸運を運んでくれる神様のおつかいね」

人間のお母さんはそう言って、やさしくブラッシングしてくれる。

「たまはいいなあ。お母さんがふたりもいて、いつもみんなといっしょで」

ランドセルをしょった小学生在がわたしをのぞきこむ。

「ぼくの家族はみんなお仕事に行ってるから、家に帰ってもひとりぼっちなんだよ」

「ミャア、さびしくなったらいつでも遊びに来て」

「太好了。這樣我也可以暫時放下心來了。我是媽媽，母親是我和我的母親……雖然有點複雜，但是你有兩個媽媽，一個貓媽媽和一個人類母親，你真是隻幸福的貓！」

「喵鳴，喵鳴！我是隻幸福的貓。」

從那時起，我被起名叫「小玉」，成了這個車站的貓。



人類母親、咪可媽媽、客人們……在所有人的守護下，我漸漸長大。

兒時亂蓬蓬的混在一起看上去像是老鼠似的毛色，長成了三色分明的漂亮毛色。

「很少有這種三色這麼分明的三色貓呢。」

「這孩子很吉利啊。」

來店裡的客人們紛紛讚許我。

「小玉一定是上天的使者，它會給小賣部和車站帶來幸運。」

人類母親如此說著，溫柔地幫我刷毛。

「小玉真好。有兩個媽媽，還一直有人陪在身邊。」

背著書包的小學生探頭看著我。

「我家裡人都去上班了，回到家我也是孤單一人。」

「喵，你寂寞的話可以隨時來找我玩。」



お母さんもミーコママも言う。

「たまもさびしがりやさんだから、みんなが遊びに来てくれると嬉しいのよ」

「大歓迎だにゃあ」

「ありがとう、たま、ミーコ」

わたしたちの家には、いつもいろいろな人が集まってくる。ここはみんなが集まるあたたかな場所。そう思うとなんだかとても嬉しくなっちゃう。やさしい人間のお母さんと、明るくて楽しい美人ママ、仲良しのお客さんたち、ゴトゴト走ってくる小さな電車。わたしは自分の住むこの駅が大好き。



季節がひと回りする頃、新しい友達がやってきた。

「たま、お向かいのたこ焼き屋さんにかわいい子犬が来たわよ」

動物好きのお母さんが嬉しそうに報告してくれる。

「わあ、すぐにあいさつしなくちゃ」

道の向かい側のたこ焼き屋さんの店先に、金色の毛並みの犬の女の子がちょこんと座っていた。

「こんにちは。わたしはミーコ、この子はたま。おむかいの売店で飼われているのよ。ほら、たま、ごあいさつして」

ちょっと恥ずかしくて、隠れるようにしていたわたしをママが鼻先で押し出す。

「は、はじめまして」

「はじめまして。レオです」

犬の女の子も恥ずかしそうに、でもとってもかわいい笑顔であいさつしてくれて、わたしはいつまでこの子が好きになってし

母親和咪可媽媽也說道：

「小玉也是個怕寂寞的，大家來找它玩它會很開心哦。」

「非常歡迎喵。」

「謝謝小玉，謝謝咪可。」

我們家裡，總是會有很多人。這是一個大家聚在一起的溫暖之地。想到這裡就會非常開心。溫柔的人類母親、開朗愉快的美人媽媽、關係親密的客人們，還有哐噹哐噹開來的小小電車。我最喜歡我住的這個車站。



季節走過一輪時，我有了一個新朋友。

「小玉，對面的章魚燒店來了隻可愛的小狗哦。」

喜歡動物的母親很開心地告訴我。

「哇，那要趕快去打個招呼。」

在馬路對面的章魚燒店前面，孤零零地坐著一隻金色毛髮的小狗，是個女孩子。

「你好。我是咪可，這孩子叫小玉。我們是對面小賣部的。好了，小玉，和人家打個招呼。」

我有點害羞，躲在媽媽的後面。媽媽用鼻尖把我頂了出來。

「初，初次見面。」

「初次見面。我叫利奧。」

狗姑娘也很害羞的樣子，但是卻露出可愛的笑臉和我打招呼，我一下子就喜歡上了她。雖然她的體型比我要大得多，但總覺得像



まった。体はわたしよりずっと大きいけど、なんだか妹みたい。

「ねえ、今度、駅の方にも遊びに行ってい？」

「もちろん。いっぱい遊びうね」

わたしたちはその日からすっかり仲良しになった。

それからしばらくして現れたのがセキレイのおまっちゃん。楽しそうに遊んでいるわたしたちの姿を見て、自分も仲間に入りたくなったんだって。

おまっちゃんは、とってもおしゃべりでいつもしっぽとおしりをふりふりしながら、ひっきりなしにしゃべっている。お母さんや駅のお客さんたちはそんなおまっちゃんのことを「しりふりおまっちゃん」って呼んでいる。

「チチ、チュピチュピ。わたしはね、あんたたちよりずっと広い世界のことを知ってるのよ。なんたって、翼があつてどこへでも自由に飛んでいけるんだから。知りたいことがあつたらなんでも聞いてよ。わたしが全部、教えてあげるから」

おまっちゃんって、体は小さいけどわたしやレオちゃんより年上なんだ。だから、いつもすごくお姉さんぶって、ちょっぴり偉そう。でも、面倒見が良くてやさしくて、わたしたちはみんなおまっちゃんが大好き。

「この線路をずっととどつていくと大きな町に出るんだよ。背の高いビルが並んでいて、とってもたくさん人間がいるんだよ」

おまっちゃんは、自分が見てきたことをいろいろ話してくれる。わたしもレオちゃんも感心してそれを聞くの。



そんなある日、悲しい事件が起こった。

是妹妹一樣。

「喂，下次，我們可以一起去車站那邊玩嗎？」

「當然。要多一起玩。」

從那天起，我們成了非常要好的朋友。

之後過了不久，另一個來到我們身邊的是白面鳥小真。她說看著我們玩得很開心的樣子，自己也想加入我們了。

小真特別愛說話，她總是一邊搖著尾巴、扭著屁股，一刻不停地說話。母親、車站裡的乘客們都把這樣的小真稱為「搖尾巴的小真」。

「啾啾，啾啾啾。我啊，知道的世界可比你們廣闊得多。不管怎麼說，因為我有翅膀，可以自由地飛翔到天涯海角。任何你想要知道的，都可以問我。我會知無不言，言無不盡。」

小真雖然體型小巧，但是比我比利奧都要年長。所以，她總是擺出大姐頭的樣子，看上去有點傲慢。但是，她非常會照顧人也很溫柔，我們都非常喜歡小真。

「沿著這條鐵軌一直往前，會出現一個很大的市鎮。高樓大廈鱗次櫛比，有很多人類哦。」

小真和我們分享她的所見所聞，我和利奧也都會佩服地聽她說。



有那麼一天，發生了一件令人悲傷的事件。



仲良しのわたしたちを遠くから見ている子ねこに気づいたのは、その少し前。その子には、ねこのお母さんも人間のお母さんもないみたいだった。ママとよく似たキジトラねこだったから、お母さんは「もしかして、遠い親戚かもしれないね」なんて言って、店先にごはんを置いてあげていたの。

「親戚!! いとこかな、はとこかな」

子ねこはとっても臆病で、いつもこっそりとごはんを食べに来て、隠れるように帰っていってしまう。でも、お母さんのごはんのおかげでふくふく丸くなってきて、わたしたちにも少しずつ近づいてくるようになった。

「きっと、恥ずかしがりやなんだね」

「捨てられて怖い思いをたくさんしたのかも。でも、わたしたちが怖くないってわかれば、もうすぐいっしょに遊べるようになるね」

わたしたちは、その子と仲良くなるのを楽しみにしていたんだ。でも、ある日、怖い声が聞こえた。

「野良ねこに餌をやらないでくれ。ねこが増えると困るんだよ」

時々やってくる売店のおじさんの声だった。わたしはびっくりしちゃった。世の中には動物がきれいな人もいるし、みんながねこをかわいがってくれるわけじゃないんだ。

「すみません」

お母さんはとても悲しそうだったけど、もう子ねこに餌をあげることはできなくなった。

なにより悲しかったのは、やっと慣れてきた子ねこが、おじさんの怒鳴り声におびえて逃げ出したこと。わたしたちは子ねこを心配しながらも、どうすることもできないでいた。

在那之前，我們發現有隻小貓一直從遠處看著親密無間的我們。那隻小貓好像既沒有人類母親也沒有貓媽媽。它是隻長得和媽媽很像的虎斑貓，所以母親帶著「也許是咪可的遠房親戚」這樣的想法，在小賣部前給它放上吃的。

「親戚!? 是堂的，還是表的？」

小貓非常膽小，總是悄悄過來覓食，然後偷偷跑走。但是，多虧了母親的投餵，它慢慢地變得圓潤，也漸漸開始接近我們。

「它一定是隻很害羞的貓。」

「被丟棄以後也許經歷了很多可怕的事情。但等它知道我們並不可怕時，就會立刻和我們玩到一起了吧。」

我們都很期待可以和它成為好朋友。但是，有一天，我們聽到了可怕的聲音。

「不要給野貓吃的。貓變多的話，會很煩人的。」

那是偶爾會來小賣部的大叔的聲音。我嚇了一跳。原來世界上也有人會討厭動物，並不是所有人都會疼愛貓。

「對不起。」

雖然母親看上去很悲傷的樣子，但不能再給小貓準備食物了。

最讓人傷感的是，好不容易和我們熟悉起來的小貓，被大叔的罵聲嚇得逃走了。雖然我們很為小貓擔心，仍舊束手無策。



そんなある日。

キー、キキキーッ!! ドーン。

「なんの音？」

「ねこが車にひかれた！」

お店に来ていた人たちの声に、わたしたちもびっくりしてかけ出した。

「たまちゃん! あの子だ」

「うそ！」

お店の前の道路にキジトラの子ねこが倒れていた。お店に遊びに来ようとして、車にはねられたんだ。

「にやあ！」

わたしが大きな声で鳴くと、子ねこは最後の力をふりしぼって目を開けてわたしを見た。

「仲良しになりたかった。いっしょに遊びたかったよ、お姉ちゃん」

その目はそう言っていた。

「ちびねこちゃん」

かけようとしたけれど、子ねこはそのまま動かなくなってしまい、わたしもびっくりして体が固まったみたいに動けなくなった。振り向くとお母さんが目をまっ赤にしている。

「こんなことになるなら、うちの子にしてあげればよかった。そうすれば、ご飯だってあげられたし、車にひかれることもなかったのに」

お母さんは空き地に小さなお墓を作ってあげた。

ママもレオちゃんもわたしも、いつまでもいつまでもそこでうつむいていた。

然後有一天。

吱・嘎吱!! 咚。

「甚麼聲音？」

「貓被車軋了！」

聽到店裡客人的聲音，我們都吃驚地跑了出去。

「小玉! 是那孩子。」

「不會吧！」

在小賣部前面的馬路上，躺著一隻虎斑貓的幼崽。它是想來店裡玩，被車子撞到了。

「喵！」

我聲嘶力竭地叫了一聲，小貓拚盡最後一絲力氣睜開眼睛看了看我。

「我曾想和你們成為好朋友，曾想和你們一起玩的，姐姐。」

它的眼睛如此訴說道。

「小貓。」

我想要跑近它，但是小貓的身體就那樣再也動不了了，我也好像被嚇得僵住了一般一動也不能動。回過頭去，我看到母親紅著眼睛。

「早知道會變成這樣，我要是把它收養了就好了。如果收養了它，就可以給它飯吃，它也不會被車撞了。」

母親在空地上為它做了一個小小的墳墓。

媽媽、利奧，還有我，在那裡低頭佇立了良久。





そんな悲しいできごとがあったから、その子を見つけた時、わたしの心臓は「バクン！」と飛び出しそうになった。

「たま、たま、子ねこが倒れている！」

レオちゃんと二人で売店の前でおしゃべりをしていたらおまっちゃんが飛んできた。昨日の雨に濡れた草むらに、ママとよく似たキジトラの子ねこが横たわっていた。子ねこの体はびっしょりと濡れて、シマシマの毛が小さな体にはり付いている。

「お母さんを読んでくる！」

いつものんびりやのわたしがすごい勢いで飛んでいって、大きな声で鳴いたから、お母さんも何かあったとすぐに気づいて、わたしについてきてくれた。

「まあ！」

洋服が泥水で濡れるのも気にせず、お母さんは子ねこを抱き上げる。

「よかった、まだ息をしている」

お母さんはすぐに子ねこの体を乾かして、きれいなタオルにくるんであげた。

「この子、すっかり冷えきってる。かわいそうだけど…もう助からないかもしれない。」

「そんなのいや！」

わたしのことをじっと見つめて息を引き取ったあの子の顔が胸の中に浮かんできた。

「お姉ちゃん、この子を助けてあげて」

あの子が空の上からわたしに訴えかけているみたい。



因為有過這樣一件悲痛的事，當我發現那孩子的時候，心臟差點「砰」的一聲飛出去。

「小玉，小玉，有隻小貓倒在地上！」

我和利奧在小賣部前閒聊著的時候，小真飛了過來。在被昨天的雨水淋濕的草叢裡，一隻長得和媽媽很像的虎斑貓幼崽橫臥在那裡。小貓渾身濕透，條紋狀的貓毛緊緊貼在她的小身體上。

「我去叫母親來！」

總是不緊不慢的我，以迅猛之勢衝了出去，大聲地叫著，母親也意識到可能發生了甚麼，就跟著我過來。

「啊呀！」

母親毫不在意衣服會被泥水弄濕，把小貓抱了起來。

「太好了，還在呼吸。」

母親立刻擦乾了小貓的身體，拿乾淨的毛巾把她裹了起來。

「這孩子，已經完全凍僵了。雖然很可憐……但也許已經救不回来了。」

「我不要！」

那孩子的臉，那張緊緊盯著我嚥下最後一口氣的臉浮現在眼前。

「姐姐，救救這孩子吧。」

彷彿是那孩子正從天上向我訴說一般。



「お母さん、お願い、あきらめないで！」

わたしは夢中でお母さんをお願いした。

「できるだけのことをしましょう。たま、おまえも手伝ってくれる」

「わたし？」

「とにかく冷えた体をあたためてあげなくちゃ。お願いたま、そばであたためてあげて」

「わかった。ずっとこの子のそばにいる」

お母さんは、わたしのベッドの中に子ねこをそっと入れた。わたしは小さく呼吸をしているだけで動かない子ねこの体をペロペロなめて、肉球もペロペロなめて、ぴったりくっついてあたためた。日が暮れて、夜になってもわたしは眠らず子ねこをあたためた。でも、夜が明け、お母さんがお店を開ける音が聞こえてきても、子ねこは目を閉じたままだった。

「もうダメなのかな」

あきらめそうになったとき、あの子の顔が浮かんで、わたしは叫んだ。

「お願い、いかないで。いっしょに遊ぼう」

わたしの声が聞こえたみたいに、そのとき、子ねこがかすかに前足を動かした。

「ミャ」

子ねこは小さく鳴いてうっすらと目を開けわたしを見た。

「ミャ、ミヤマ、ミヤマ？」

わたしのこと、ママだと思っているのかな。今はこの子のママでいてあげよう。

「だいじょうぶ、だいじょうぶだよ、そばにいるよ」

「母親、求你了，不要放棄！」

我不斷懇求著母親。

「我只能盡力。小玉，你也來幫忙。」

「我？」

「總之，我們必須要讓她冷冰冰的身體熱起來。小玉，拜託了，你在她身邊幫她取暖。」

「好的，我會一直待在這孩子身旁的。」

母親把小貓輕輕地放進我的床裡。我舔著微弱呼吸著卻一動不動的小貓的身體，也舔了舔她的肉球，緊緊地貼著她溫暖她。天黑了，即使夜幕降臨我也不眠不休地幫她取暖。但是，天亮了，我聽到了母親開店的聲音，可小貓還是閉著眼睛。

「已經不行了嗎？」

正當我想要放棄的時候，那孩子的臉又浮現在眼前，我叫道：

「求你了，別走。我們一起玩啊。」

好像是聽到了我的聲音一樣，就在那時，小貓的前腳輕微地動了動。

「喵。」

小貓輕輕地叫了一聲，然後微微睜開眼睛看著我。

「喵，喵喵，喵喵。」

也許是把我當成了媽媽。現在，我要充當這孩子的媽媽。

「沒事的，你會沒事的，我就在你身邊。」



わたしが子ねこの^{からだ}体をペロペロなめたら、子ねこも小さなザラ^{した}ザラの舌でわたしのことをなめてくれた。冷^{つめ}た^{からだ}体があたたくなっている。

「助^{たす}かったんだ。もうだいじょうぶ！」

わたしは飛び上^とがってお母^{かあ}さん^よを呼んだ。

「お母^{かあ}さん、目^めを開^あけたよ。わたしのこと、ママ^よって呼んでくれたよ」

お母^{かあ}さんが走^{はし}ってきた。

「本^{ほん}当^{とう}に息^{いき}を吹^ふき返^{かえ}している。奇^き跡^{せき}みたいだわ。たま、おま^{たす}えが助^{たす}けたのよ」

うれしい。うれしくてうれしくて鼻^{はなみず}水^で出^でちゃう。

「お姉^{ねえ}ちゃん、すご^いいよ。あり^がとう」

わたしにははつきりとあの子^この^{こえ}声^きが聞^きこえた。お母^{かあ}さんがうれしそうにいった。

「たまが助^{たす}けたんだから、たまの^{いもうと}妹^{おも}だと思^{おも}ってこれからは家^か族^{ぞく}として暮^くらしましよう。そうね、と^ちつても小^{ちい}さいから名^な前^{まえ}は……ちび」

「ちび、ちび！」

「んミヤ」

こうして、わたしに新^{あた}しい^{いもうと}妹^いができた。

ママのミー^みコとちびとわたし。三^{さん}匹^{びき}のねこは貴^き志^し駅^{えき}の人^{にん}気^き者^{もの}になった。

「かわい^かい^{ぞく}家^{ぞく}族^{ぞく}だなあ」

「おま^おえ^えたちを見^みると“今^き日^{よう}も一^{いち}日^{にち}が^きんば^もるぞ”^きって^きいう^き気^き持^もち^ちになるよ」

駅^{えき}を使^{つか}うお客^{きやく}さんたちは、三^{さん}人^{にん}家^か族^{ぞく}になったわたしたちを今^{いま}ま

我^{われ}舔^{しん}了^{りょう}小^{せう}猫^{まう}の身^み体^{てい}，她^た也^え用^{よう}小^{せう}小^{せう}的^{てき}刺^し刺^し的^{てき}舌^{ぜつ}頭^{とう}舔^{しん}了^{りょう}舔^{しん}我^{われ}。冰^{ひやう}冷^{れい}的^{てき}身^み体^{てい}開^{ひら}始^じ暖^{だん}和^わ起^お來^き。

「得^え救^{きう}了^{りょう}。她^た已^い經^{けい}沒^め事^じ了^{りょう}！」

我^{われ}跳^は起^お來^き去^き喊^わ母^ぼ親^{しん}。

「母^ぼ親^{しん}，她^た醒^さ了^{りょう}。她^た叫^{けう}我^{われ}媽^ま媽^ま。」

母^ぼ親^{しん}跑^は了^{りょう}過^か來^き。

「真^ま的^{てき}活^{かつ}過^か來^き了^{りょう}。像^{よう}奇^き跡^{せき}一^{いっ}樣^{やう}。小^{せう}玉^{ぎよく}，是^し你^{なん}救^{きう}了^{りょう}她^た。」

我^{われ}很^へ開^{ひら}心^{しん}，開^{ひら}心^{しん}到^ど鼻^{はな}涕^{てい}都^ど流^{りゅう}了^{りょう}下^げ來^き。

「姐^{あね}姐^{あね}，你^{なん}真^ま厲^{れき}害^{がい}。謝^{しゃ}謝^{しゃ}你^{なん}。」

我^{われ}清^{せい}晰^し地^て聽^き到^ど了^{りょう}那^{あの}孩^こ子^し的^{てき}聲^{せい}音^{いん}。母^ぼ親^{しん}開^{ひら}心^{しん}地^て說^{せつ}道^{どう}：

「因^よ為^ゐ小^{せう}玉^{ぎよく}你^{なん}救^{きう}了^{りょう}她^た，以^い後^ご就^{しゅう}把^ば她^た當^{たう}作^{さく}你^{なん}的^{てき}妹^い妹^い，我^{われ}們^た就^{しゅう}是^し一^{いっ}家^か人^{にん}了^{りょう}。噫^い，她^た這^{この}麼^{やう}小^{せう}，名^な字^じ就^{しゅう}叫^{けう}……小^{せう}小^{せう}吧^ば。」

「小^{せう}小^{せう}，小^{せう}小^{せう}！」

「嗚^う喵^{みゃう}。」

就^{しゅう}這^{この}樣^{やう}，我^{われ}有^あ了^{りょう}一^{いっ}個^こ新^{しん}妹^い妹^い。

咪^み可^か媽^ま媽^ま和^わ小^{せう}小^{せう}還^{また}有^あ我^{われ}。三^{さん}隻^{しつ}猫^{まう}成^な了^{りょう}貴^き志^し站^{えき}最^{さい}受^{じう}歡^{くわん}迎^{いよう}的^{てき}動^{どう}物^{ぶつ}。

「真^ま是^し可^か愛^{あい}的^{てき}一^{いっ}家^か人^{にん}。」

「看^{かん}到^ど你^{なん}們^た，就^{しゅう}覺^{かく}得^て『今^き天^{てん}一^{いっ}天^{てん}也^え要^{やう}好^{こう}好^{こう}加^か油^{いう}』。」

往^{わう}來^{らい}車^{しや}站^{えき}的^{てき}乘^{じよう}客^{かく}們^た比^ひ以^い往^{わう}更^{せい}加^か疼^{てい}愛^{あい}我^{われ}們^た一^{いっ}家^か三^{さん}口^{こう}，甚^じ至^し還^{また}拿^な來^き



で以上にかわいがってくれて、みんなで材料を持ち寄って立派なねこ小屋まで作ってくれた。

「おまえたちは、すっかりこの駅のアイドルね」

お母さんに言われて、わたしたちは顔を見合わせる。

「アイドルだって」

えへへ。なんだか照れちゃうな。でも、みんながうれしくなれるなら、張り切っちゃう。

「いってらっしゃ〜い！」

わたしたちは毎朝、大きな声でみんなにあいさつをする。

材料為我們蓋了一座精巧的貓屋。

「你們啊，完全成了這個車站的明星了。」

聽母親這樣說，我們看了看彼此的臉。

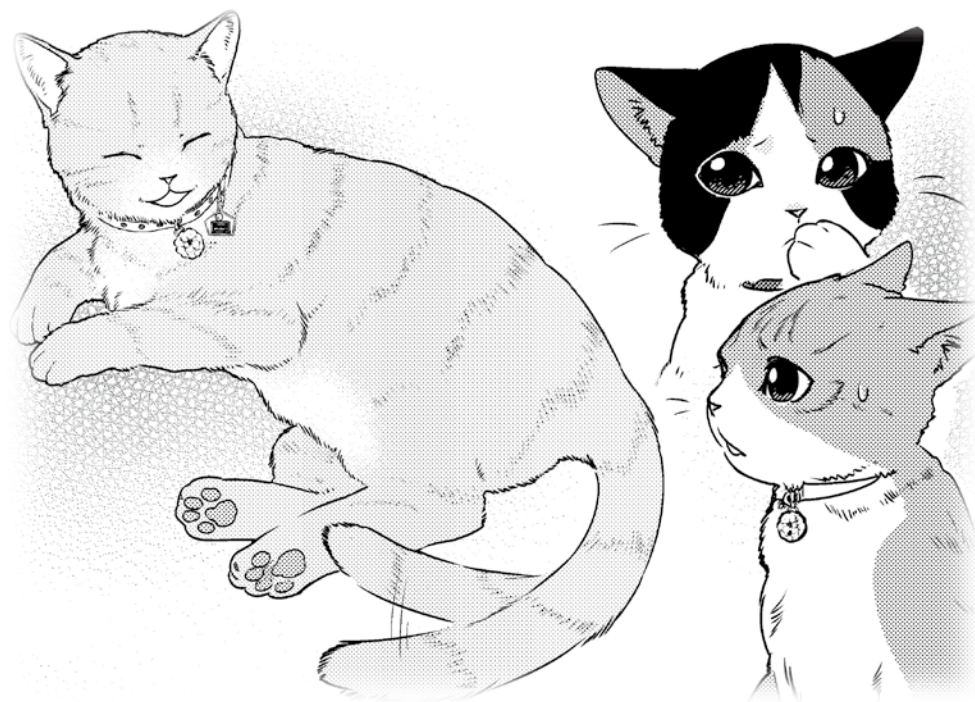
「說我們是明星呢。」

嘿嘿，好像有點害羞。但是，如果大家能覺得開心，我們也會幹勁十足。

「慢走！」

每天早上，我們都會大聲地和大家打招呼。





②

最愛的車站要消失？！

だいすきな駅がなくなる



その日もわたしはみんなにあいさつをしようと、駅舎で待っていた。

「おはよう！」

でも、今日はなんだかちょっと様子が変。おおぜいの人が集まって心配そうにひそひそ話をしている。わたしはしっぽをピンと立ててそばにかけより耳をそばだてる。

「貴志川線がなくなるってどういうことだよ」

「このオンボロ鉄道、お客さんが少なくて赤字続きらしい」

思ってもみなかった話を聞いて、わたしは胸がドキドキしてきた。

「電車がなくなったら、学校に通うことも、病院に行くことも難しくなってしまう……」

昔この町で校長先生をしていたおじさんがため息をつく。元校長先生は物知りで、頭がよくて、いつもニコニコ笑っている。定年退職をした今はのんびり暮らしているんだって。

「近くに由緒ある神社もあるし、かわいい三匹のねこもいるし、貴志駅はいい駅だね」

そう言って、散歩に来てはなでてくれる。わたしもママもちびも元校長先生が大好き。

「電車がなくなったらこの町はどうなるのかね」

いつも売店に買い物に来て、お母さんとおしゃべりをしていく

那天，我也想著要向大家問好，在車站等著。

「早啊！」

但是，今天好像哪裡不對勁。很多人聚在一起，交頭接耳，看起來神色憂慮。我翹起尾巴走到跟前，豎起了耳朵。

「貴志川線要停運是怎麼一回事啊。」

「這個破舊不堪的鐵路，好像因為乘客很少一直虧損。」

聽到出乎意料的事情，我也心跳加速起來。

「如果電車停運，上學、去醫院都會變得很困難……」

曾任區裡學校校長的大叔歎氣。老校長知識淵博，頭腦聰明，總是笑嘻嘻的。據說現在退休了，過著悠閒的日子。

「附近有歷史悠久的神社，還有三隻可愛的小貓，貴志站是個很好的車站啊。」

老校長如此說著，每次散步過來都會摸摸我們。我和媽媽還有小小都很喜歡老校長。

「要是電車停運，這個小城區會變成甚麼樣啊。」

經常來小賣部買東西、還喜歡和母親聊天的阿姨，擔憂地詢問

おばあちゃんが心配そうに元校長先生に訊ねる。

「きっと、この町からおおぜいの人が出て行ってしまうだろうな」

みんな顔をみ合わせる。お母さんもとても心配そう。

「貴志川線がなくなったら、この駅もなくなってしまう。売店に買い物に来てくれる人もいなくなって、このお店もなくなっちゃうわ」

わたしはびっくりして飛び上がる。

「駅がなくなる？お母さんのお店がなくなる？いや！そんなのぜったいにダメ！」

「大丈夫よ、たま。電車がなくなるなんて、そんなバカなことあるはずないもの。きっと、ただのうわさ話よ」

ママはそう言ってわたしを元気づけてくれるけれど、しっぽをパタンパタン、せわしなくふり続けているから、本当はすごく心配でたまらないんだってわたしにはわかる。

そして、恐れていたことが本当になった。「貴志川線廃止」の発表がされたんだ。

「電車が本当になくなっちゃうぞ」

「この町に住めなくなってしまう」

町は蜂の巣を突いたような大騒ぎになった。

「町長さん、なんとかしてくださいよ」

「知事さん、どうにかありませんか」

「わたしもどうしていいかわからないよ」

町や県の偉い人に相談しても、「どうにかして鉄道を残してください」と鉄道会社をお願いしても、誰にもいい考えは浮かばなかった。

老校長。

「一定会有很多離開這個小城區吧。」

大家面面相覷。母親也很擔心的樣子。

「如果貴志川線停運，這個車站也會消失。也沒人來小賣部買東西，這家店也就沒有了。」

我驚得跳了起來。

「車站要消失？母親的小賣部要關門？不行！絕對不能這樣！」

「沒關係，小玉。電車停運甚麼的，不可能有這樣愚蠢的事情發生。那一定只是謠言。」

媽媽雖然這麼說著給我打氣，但她一直焦慮地不停啪嗒啪嗒甩著尾巴，所以我知道她其實也擔憂得不得了。

然後，噩夢成真。「貴志川線停運」的消息被發佈。

「電車真的要停運了啊。」

「沒法住在這個城區裡了。」

區裡就像被捅了的馬蜂窩一樣，亂作一團。

「區長，你想想辦法啊。」

「縣長¹，還有沒有迴旋餘地？」

「我也不知道該如何是好。」

無論是和縣裡或是區裡的大人物協商，還是請求鐵路公司想辦法把鐵路保留下來，誰也沒有想到甚麼好主意。

1 編按：原文為「知事」，指行政區域首長。故事發生地點為和歌川縣，故譯為「縣長」。



「みんな、どうしたって他人事なんだよ。やっぱり、同じように困って、電車を残したいと願っている仲間でなんとかしないとダメなんじゃないかな」

誰かがそう言った。
「そうだ！ 元校長先生に頼んだらどうだろう。あの人は、とても頭がいいし、粘り強い人だ。それに、なにより貴志川線のことを大好きで心配しているもの」

「よし、みんなで頼みに行こう」
「わたしも行く！ いっしょに頼みに行く」
わたしも夢中で叫みだけれど、みんなは「煮干しが欲しいのかい？ たまはのんきでいいなあ」なんて失礼なことを言ってわたしを置いていってしまった。

もう、わたしだっていっしょうけんめいなのに。自分が小さなねこだってということが、くやしい。わたしだって大事な駅を守りたいのに。みんなの役に立ちたいのに。

「チチチチ」
おまっちゃんが飛んできた。
「だいじょうぶだよ。わたしが代わりにについていってどうなるか見てきてあげる」

おまっちゃんはそう言うともみんなの後について飛んでいってしまった。



その日から、町の人たちの大奮闘がはじまった。
「元校長先生は、“そんな難しい仕事わたしにはムリです”って言っていたけど、みんなの熱心さに負けて“貴志川線を守る会”

「無論大家怎麼做，對他們而言都是置身事外的。還是要面對同樣困擾的、希望把電車保留下來的夥伴們一起想想辦法。」

有個人如此說道。

「有了！我們去找找老校長如何？那個人又聰明又不會輕言放棄。而且，他那麼喜歡貴志川線，也為之擔憂。」

「好，我們一起去找他吧。」

「我也去！一起去拜託他。」

我也大聲疾呼，大家卻說著「是想要小魚乾嗎？小玉這麼悠閒真好」之類失禮的話，留下我一個人。

真是的，我明明也那麼拚命。真不甘心，自己只不過是隻小貓。我明明也想保護最重要的車站，也想幫上大家。

「嘖嘖嘖嘖。」

小真飛了過來。

「你放心，我會替你跟上去看看。」

小真說完跟在大家後面飛走了。



從那天起，居民們的大奮戰拉開帷幕。

「老校長雖然之前說『這麼難的工作我無法勝任』，但還是抵不住眾人的熱情，擔任了『貴志川線保護會』的會長。」



という会の会長^{かい かいちょう}さんになってくれたよ」

おまっちゃんが教えてくれた。

「みんなの鉄道^{てつどう}だから、誰か^{だれ}に頼^{たよ}ってはダメです。昔^{むかし}はみんな^{みんな}で鉄道^{てつどう}を作^{つく}ったんです。今^{こん}度はみんな^{みんな}で守^{まも}りましょう」

先生^{せんせい}はそう言ったんだって。

「電車^{でんしゃ}を守る^{まも}の？」

「そうだよ。大切^{たいせつ}なものは自分^{じぶん}で守^{まも}らないといけないんだよ」

わたしは不思議^{ふしぎ}そうに首^{くび}を傾^{かし}げているちび^{おし}に教えてあげた。

「お姉ちゃん^{ねえ}はわたし^{わたし}を守^{まも}って助^{たす}けてくれたんだよね」

「そうだよ。ちび^{ちび}はわたし^{わたし}の大切^{たいせつ}な妹^{いもうと}だから」

「えへへ。大切^{たいせつ}な妹^{いもうと}」

ちび^{ちび}はうれしそうに笑^{わら}う。

「お姉ちゃん^{ねえ}はすごいね。きっと、電車^{でんしゃ}も駅^{えき}も守^{まも}って、助^{たす}けてくれるね」

ちび^{ちび}にそう言^いわれると、なんだか、わたしにも何^{なに}かできるような氣^きがしてくる。

みんなこの駅^{えき}が、ここを走^{はし}る電車^{でんしゃ}が大切^{たいせつ}なんだ。だから守^{まも}ろうとしているんだ。わたしもこの駅^{えき}が好き^すき。そして、ここに集^{あつ}まるみんなが大好き^{だいす}き。だから、いっしょにがんばる。

「ちびもがんばるんだよ」

「え、わたしも？」

「もちろんだよ。この駅^{えき}が好き^すきでしょ？ みんなが好き^すきでしょ？」

「うん、大好き^{だいす}き。そうか、大好き^{だいす}きで大切^{たいせつ}なものは自分^{じぶん}で守^{まも}らないといけないんだね」

「わたしも応援^{おうえん}するよ。チチチ」

おまっちゃんも力^{ちから}いっぱいおしりを振^ふってみせる。

小真^{こまこと}這麼告訴我。

「這是大家的鐵路，不能依靠某個人。過去是我們一起建造了鐵路，這次就由我們來保護它吧。」

小真^{こまこと}說老校長如此說道。

「保護電車？」

「是啊。重要的東西必須由自己來保護。」

小小^{こまこと}很不可思議似的歪著腦袋，我如此告訴她。

「是姐姐保護了我救了我吧。」

「是啊，因為小小是我重要的妹妹。」

「嘿嘿，重要的妹妹。」

小小^{こまこと}高興地笑了。

「姐姐真厲害。一定也能保住電車和車站，化解危機。」

聽小小^{こまこと}這麼一說，總覺得，連我也可以做些甚麼。

這個車站、在這裡行駛的電車對大家很重要。所以，才要保住它。我也喜歡這個車站。而且，我最喜歡聚集在這裡的人。所以，我要和大家一起努力。

「小小也要努力哦。」

「啊，我也要嘛？」

「當然。你喜歡這個車站吧？喜歡大家吧？」

「嗯，非常喜歡。對哦，最喜歡的最珍貴的東西，必須要由自己來保護。」

「我也會給大家打氣的。嘰嘰嘰。」

小真^{こまこと}也使盡全力搖了搖尾巴。



「たま、ちび、いっしょにがんばろうね」

ママもやる気満々で耳としっぽがピンと立っている。

いつのまにか元校長先生がそばに来ていた。

「たま、わたしたちを手伝ってくれるかい」

先生はやさしくわたしの頭をなでながら言う。

「なによりも電車に乗る人を増やさなくちゃね。まずは、町の人たちに“貴志川線を守る会”のことを知ってもらって、そして、どんどん電車に乗ってもらおう」

「うん。わたしたちも、みんなが楽しくなるように、いっぱいあいさつするね」

みんな、不安で押しつぶされそうだし、大変なこともたくさんあるんだけど、でもね、なんだか少し楽しそう。駅の待合室にきれいなお花を飾ってくれる人がいたり、お休みの日に集まってトイレの掃除をする人がいたり、子供たちがみんなでポスターを描いて貼っていたり。町の中には「貴志川線を守ろう」とか「乗って残そう貴志川線」って書かれた旗がいっぱい立てられたっておまっちゃんが教えてくれた。

わたしは、駅を守ろうとする人たちが楽しくなるように、明るくあいさつして応援した。

「この駅に来て、たまたちの顔を見ると元気になるよ」

おおぜいの人がそう言ってくれど、わたしもうれしくてほっぺたが熱くなった。そうか、わたしはみんなを元気にできるんだ。

町の人たちと、わたしやちび、ママやおまっちゃんの応援のあいもあって、「貴志川線を守る会」の会員はとうとう六千人を超えた。テレビの取材もやってきて、町の人たちが力を合わせて電車を守ろうとしている活動はおおぜいの人から注目されるように

「小玉、小小、我們要一起努力。」

媽媽也充滿幹勁地豎起了耳朵和尾巴。

不知何時，老校長來到了我們身邊。

「小玉，你能幫幫我們嗎？」

老校長一邊溫柔地摸著我的頭，一邊如此問道。

「最重要的是必須讓更多的人來乘坐電車。首先，我們要讓居民知道『貴志川線保護會』的事情，然後讓他們不斷地來坐電車。」

「嗯。為了讓大家開心，我們也會多多問好。」

所有人彷彿都快要被不安所壓垮，也有很多夠噏的事情，但是，氣氛中又洋溢著些許愉悅。有人在車站的候車室裝飾上花，有人在休息日聚集起來打掃廁所，孩子們一起畫海報貼在車站。小真告訴我，城區裡掛上了很多寫著「保護貴志川線」「乘坐貴志川線，留下她」之類的旗子。

為了讓保護車站的居民可以變得開心，我明快地和他們說話為他們加油。

「來到這個車站，看到小玉你們的臉就會變得有精神哦。」

很多人這麼告訴我，我也高興得臉都發燙了。是嗎，我可以讓大家打起精神來。

在居民們、我和小小、媽媽、小真的支持下，「貴志川線保護會」的會員超過六千人。也有電視台前來採訪，居民們齊心協力保護電車的活動被眾人關注起來。



なった。

そして、ある日、元校長先生が駅にかけこんできてわたしを抱き上げたの。

「たま！ 電車も駅もなくならないことに決まったよ」

え！ え！ やったあ！

「やったね、やったね、すごい！」

「どうしたの？ なにがあったの？」

ママとちびも集まってきた。

「おお！ ミーコ、ちび、この駅はなくならないぞ。貴志川線を引き受けてくれる会社が見つかったんだ」

「こんなオンボロのびんぼう電車、引き受けてくれるなんて、どんな物好きの会社なの」

お母さんもお店から出てきて元校長先生に聞いた。

「岡山の鉄道会社だよ。今までにない楽しい電車を作って大人気になった会社なんだ。だから、わたしたちはみんなでその会社の社長さんに会いに行ったんだ。社長さんは、みんなががんばればきっと貴志川線を残せるって言うんだよ。わたしたちの町にはすばらしい所がたくさんあるから、きっとおおぜいの人が乗りたくなる楽しい電車にできるって」

元校長先生が目キラキラさせて話すのを聞いていたら、わたしまでワクワクして、なんだか、きっとうまいくっていう気がしてきた。みんなをこんなにワクワクさせてくれるなんて、どんな会社のどんな社長さんなんだろう。

わたしは飛び上がりたいほどうれしくて、社長さんに会ってみたくてたまらなくなった。

然後，有一天，老校長跑著來到車站把我抱了起來。

「小玉！已經決定留下電車和車站了。」

喵！喵！太好了！

「我們做到了，做到了，真棒！」

「怎麼了？發生了甚麼？」

媽媽和小小也聚了過來。

「啊！咪可、小小，這個車站保住了。我們找到了接手貴志川線的公司。」

「願意接下這麼破舊不堪的電車，是家怎樣奇怪的公司啊。」

母親也從店裡出來，這麼向老校長問道。

「是岡山的一家鐵路公司，打造過很多史無前例的有趣電車，是一家非常受歡迎的公司。所以，我們去見了那家公司的社長，社長說只要大家齊心協力，一定能把貴志川線留下來。我們區裡有很多非常棒的地方，他說一定能把貴志川線打造成很多人想要搭乘的快樂電車。」

老校長眼睛閃爍著，聽他這麼說我也興奮起來，總覺得一定會順利。能讓大家這麼興奮的，到底會是家甚麼樣的公司，又是個甚麼樣的社長呢。

我高興得想要跳起來，抑制不住想要見一見社長的心情。





③

命運的相遇

うん めい で あい
運命の出会い



よく晴れた気持ちのいい朝だった。

わたしが生まれてから七度目の桜の季節。今年の桜はいつも増してきれいに咲いているような気がする。

今日は、この駅にとって特別な日。わたしにとっても、新しい運命がスタートする特別な日になるんだけど、このときのわたしはまだそんなこと知らない。それよりも、大きな心配事を抱えて、わたしの胸はその日の空とは正反対、どよんと重く沈んでいた。

その年の春、貴志川線は「和歌山電鐵貴志川線」として新しく生まれかわることになった。今日は、その一日目。まだ暗いうちからおおぜいの人が集まってセレモニーの準備をしている。みんなの胸は新しい出発への希望でパンパンにふくらんでいて、わたしたち一家の心配事に気づいている人はいないみたい。

たいへんなことが起こったのは一週間前。

お母さんがお店の横に置かれたわたしたちの家をのぞきこみ、その前を行ったり来たりして、困ったように頭を振り、最後には泣きそうな顔になって大きな大きなため息をついて座り込んでしまった。

「お母さん、どうしたの？」

わたしはお母さんの足にスリスリ、クルクルして、お母さんを元気づけようとした。

那是一个天气晴朗、舒适的早晨。

這是我出生後第七個櫻花開放的季節。我覺得今年的櫻花比以往都要開得美一點。

今天對於這個車站而言，是個特別的日子。於我而言，雖然也是拉開嶄新命運帷幕的一個特別日子，但是當時的我還並不知曉。比起這個，我當時正為一件大事擔心，心情和這天氣正相反，陰鬱沉重。

那年春天，貴志川線作為「和歌山電鐵貴志川線」重生。今天是她重生的第一天。天尚未明的時候很多人就聚集起來，為慶典做著準備。眾人的心中充滿了對嶄新出發的希望，好像並沒有人注意到我們一家所擔心的事情。

令人擔憂的事件發生在一週前。

母親探頭看了看放在小賣部旁的貓貓之家，並在貓屋前來回徘徊，像是很苦惱地搖著頭，最後哭喪著臉，重重地歎息，癱坐在地上。

「母親，你怎麼了？」

我蹭著母親的腳，繞著她的腳打轉，想讓母親振作起來。



「たま、どうしよう。もうここでいっしょに暮らせなくなるかもしれないよ」

「え？ どういうこと」

ママとちびもねこ小屋の中から出てきた。

「役場の人が来てね、ここにおまえたちの家を置いたらいけないって言われたんだよ」

貴志川線は新しい会社のもとで再出発することになり、駅や周りの土地は貴志川町のものになった。つまり、貴志川線も貴志駅も「公共施設」になったってということで、「公共施設」ではないねこ小屋は……ここに置いておくわけにはいかない！ ってわけ。

それって、つまり、このままここに勝手に住んでいたら、わたしたち不法滞在ねこ。

「みんなが使いやすい駅にするために裏の事務所を取り壊して駐輪場を作ります。ここは駐輪場へ行くための道になりますから、ねこ小屋は片付けてください」

役場の人からそう言われて、お母さんは飛び上がった。

「お店では食べ物を売っているからこの子たちを住ませるわけにはいかないし、他には小屋を置く場所はないし、わたしの家には昼間は誰もいない。それにこの子たちはこの駅のねこだもの。この子たちがいなくなったらお客さんたちがすごくがっかりする……」

どうしたらいいのか、お母さんにもわたしたちにもいい考えがなにひとつ浮かばないまま、運命の日がやってきた。

わたしたちの胸が心配でつぶれそうになっているのにおかまい

「小玉、该怎么办。也許我們無法一起在這裡生活下去了。」

「嗯？ 怎麼一回事。」

媽媽和小小也從貓屋裡出來。

「政府的人來告訴我，不能把你們的家放在這裡。」

隨著貴志川線在新公司旗下重新運營，車站和附近的土地都成了貴志川町の東西。也就是說，貴志川線和貴志站都已經變為「公共設施」，不屬於「公共設施」的貓屋……是不可以放在這裡的。

這樣一來，如果我們還隨便住在這裡的話，就成了非法滯留貓。

「為了把車站打造成更便捷的車站，要將後面的辦公室拆掉建成停車場。這裡會成為去停車場的必經之路，請把貓屋處理掉。」

聽政府的人這麼一說，母親跳了起來。

「小賣部裡在賣吃的，我也不能讓孩子們住在裡面，我也沒有其他地方可以安置它們，家裡白天也沒有人。而且，這些孩子們是這個車站的貓。如果沒有這些孩子，車站的乘客會非常失望的……」

母親和我們不知道該如何是好，在束手無策之中，命運之日來臨了。

儘管我們的心已經快要被擔憂所壓垮，但是慶典還是照常開始



なく、セレモニーが始まった。生まれかわった貴志川線の始発電
車をみんなで送り出すんだって。

駅前広場の壇の上に立ち、お話をしている、あの人が社長
さん？

わたしたちは三匹でかたまて、その人のことをじっと見つ
める。

この人もわたしたちを追い出そうとしているのかな？ でも、
そんな怖そうな人には見えないな。

「今から十年間は県や市が貴志川線を守る約束をしてしてくれまし
た。けれど、わたしは二十年後、三十年後もこの電車が走り続け
ていられるようにここに来了たのです。そのために、みんなでがんば
りましょう」

社長さんはそう言った。

二十年後、三十年後……。わたしには想像もつかない先のこと。

そして、始発電車がみんなの歓声に送られて出発した。

セレモニーは終了。町の人たちが片付けを始めたその時、お
母さんが意を決したようにいきなりわたしを小屋の中におしこ
んだ。

「わわ、お母さん、どうしたの」

お母さんは、唇をギュッとひき結び、弾丸みたいな勢いで、
帰ろうとしていた社長さんめがけて走っていく。

「社長さん、待ってください」

すごい顔をして髪の毛を振り乱し、華やかなセレモニーに不似
合なかつぼう着姿で飛んできた「売店のおばさん」にいきなり
目の前に立ちをはだかれて、社長さんは目を白黒させている。

「社長さん、たまを見に来てください。たまたちを助けてくだ

了。説是要大家一起見證重生的貴志川線電車的首運。

站在車站前廣場舞台上正在講話的那個人，是社長嗎？

我們三隻貓僵立著，直直盯著那個人。

這個人也想要把我們趕走嗎？但是，他看上去不像那麼可怕
的人。

「縣裡市裡已經承諾，將從現在起保護貴志川線十年。但是，我
是為了讓電車可以在二十年後、三十年後依舊行駛而來到這裡的。
為了這個目標，我們一起加油吧。」

社長如此說道。

二十年、三十年後……這是我難以想像的未來的事情。

然後，在眾人的歡呼聲中，始發電車出發了。

慶典結束。正當居民們開始收拾的時候，母親像是做了甚麼決
定似的把我們推進了貓屋裡面。

「哇，母親，怎麼了？」

母親，緊緊抿起嘴唇，箭步朝著正要離開的社長衝了過去。

「社長，請等一下。」

表情嚴肅、頭髮凌亂，穿著與盛大慶典不符的圍裙的「小賣部阿
姨」突然衝到社長跟前，令他非常吃驚。

「社長，請你來看看小玉。請幫幫小玉它們。」



さい」

わわ！

わたしだって、びっくりだよ。社長さんってえらい人でしょ？
その人にいきなりこんなことしちゃっていいの？

でも、社長さんはちゃんと立ち止まってお母さんの話を聞いてくれた。

「まあまあ、落ち着いて。わたしは逃げません、ゆっくり事情を話してごらんさい」

「たまたちの住む場所がなくなってしまうんです」

お母さんは、はあはあ息を切らせながら、わたしたちがどんなに困っているか社長さんに説明した。

「売店の横が道になったら、ねこ小屋を置ける場所は駅しかありません。この子たちを駅に住まわせてあげてください」

「うーん」

社長さんは腕組みした。

「助けてあげたいけれど、でも、個人のペットを駅に住まわせるのは、難しいなあ……」

「でもね、社長さん、たまはとっても貴重な三毛猫なんですよ。ほんとうにきれいに毛の色が分かれた三毛猫はめったにいない、百万円出すからゆずって欲しいって言われたことだってあるんだから！ 三毛猫はオスだったら三百万円よ！ 商売の守り神なのよ」

「ひゃあ、お母さんったら、なんて大胆な発言。わたし、だれからも欲しがられなかったねこなんだよ、それなのに百万円とか三百万円とかって、社長さんに怒られちゃうよ」

ねこは汗をかかないんだけど、もう心の中では冷や汗ダラダラ。

哇！

連我也嚇了一大跳。社長是地位很高的人吧？和他突然說這些可以嗎？

但是，社長停住腳步，聽了母親說的一番話。

「好了，請冷靜。我不會逃走，你可以慢慢地告訴我這是怎麼一回事。」

「小玉它們要無家可歸了。」

母親喘著氣，向社長說明我們有多麼為難。

「小賣部的旁邊如果變成馬路，就只能把貓屋放在車站了。請讓這些孩子們住在車站吧。」

「嗯……」

社長抱起胳膊。

「我也很想幫助它們，但是，讓私人寵物住在車站，太難辦了……」

「但是，社長，小玉可是非常貴重的三色貓。像這麼毛色分明的三色貓非常罕見，甚至有人願意出一百萬日元讓我把小玉讓給他。三色公貓更是值三百萬日元！小玉是商販的守護神啊。」

「天啦，母親啊，竟然說出這麼狂妄的話。我可是誰也不願要的貓，還說甚麼一百萬甚麼三百萬日元的，社長會生氣的吧。」

雖然貓不會出汗，我的心裡面卻冷汗直流。